

地理学景観論は社会評論として役立つか？

—— 境界領域に立つ辻村太郎, 石原憲治, 城戸幡太郎の1930年代 ——

西 部 均

要 旨

本稿は、社会的に共有される地理的知として役立つ地理学景観論のあり方を探るために、1930年代に学問分野の境界領域において地理学景観論を活用して独創的な社会評論を執筆した3人の学者の思想に注目する。地理学者の辻村太郎は、植物生態学から、全体として統制された建築物群や経済機能の関係性の調和を評価した。都市計画技師の石原憲治は、キリスト教に基づく全体性の思想から、進化論的に全体調和を約束された地方の風景において、群としての自然と人工物を設計しようと試みた。教育心理学者の城戸幡太郎は、ヴントの民族心理学批判から、民族文化の発展を決定する具現化された人間の生活場面に価値を認め、対立する立場からの景観表象によって抗争場面と化している子供たちの教育現場を変革するように論じた。

彼らが各々の視座から都市や農村の社会評論を執筆した1930年代は、さまざまな景観論が活発に発表された時代でもある。その背景には、新しい視覚的装置が普及し、それにともない、画像のなかに多くの情報を解読できる視覚的思考が広まる社会的状況があった。そのなかで3人の学者は、地理学景観論を援用して、批評の対象を全体との生態学的関係や過去・未来との進化論的關係に位置づけて、その調和の程度を評価した。景観論の強みが数多くの事象の系列化にあるとすれば、地理学景観論の社会評論としての可能性は、複雑な事象間の関係分析の理論構築にかかっているといえよう。

キーワード：地理学、景観論、社会評論、1930年代、視覚的思考

(2006年10月11日論文受理, 2006年12月1日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

1. はじめに

地理的知は、近代期に確立された学問分野としての地理学に占有されることなく、生活者の知恵、企業家の戦略、為政者や犯罪者の謀略、ありとあらゆる知的営為のなかに見出される。本稿で問題とする景観を描写するという知的営

為もまた、古今東西の知識人に驚くほど広く深く愛され、文章や絵画として無数に遺されている。景観を描写するということがなぜこれほど人を惹き付けてやまないのか。そこには、人間の現存在に密接に係わる根源的な欲望や願望が秘められているからではないだろうか。今日も景観を論じる知的営為はさまざまな分野の知識

人によって精力的に継承されている。景観を論じることで、生物学者や心理学者は動物や人間の知覚や認知機構を解明し、哲学者は人間の対象認識を追究し、工学者や農学者は人間にとって快適な環境の設計を試み、社会評論家は自我と社会との密接な関係を論証している。景観論はまさしく学際的な知のアリーナであり、人間理解のための熱い議論がこの場で闘わされている¹⁾。

ところが、近代科学としてもっとも古くから景観論に取り組んできたはずの地理学者たちは、好んでこの知のアリーナに上ろうとしてこなかった。その理由の一つとして、1930～1950年代に数多くの成果を残してきた日本の地理学景観論は、不幸なことに、景観論が学際的な隆盛を見せ始めた1960～1970年代という時期に、逆に衰退へと向かい、忘れられてしまい、埋めがたい時間差を生じていたことが挙げられる。しかし、1980年代以降、地理学景観論が再び活況を呈することとなり、いまだに僅少であるけれども知的交流が生まれつつある²⁾。

そこで、筆者は社会に開かれた地理学景観論のあり方について考えるために、地理学アカデミズムの世界に封印された感のある戦前期の地理学景観論を振り返り、地理学景観論を活用した社会評論の貴重な事例を紹介する。本稿で紹介するのは、地理学と他学科との境界領域に発表された独創的な3つの事例である。すなわち、植物生態学と地理学を結び付けた地理学者の辻村太郎(1890-1983)、地理学と都市計画を結び付けた都市計画技師の石原憲治(1895-1984)、そして地理学と心理学を結び付けた教育心理学者の城戸幡太郎(1893-1985)の論稿である。彼らはいずれも専門学科を越えて幅広い分野にわたる知識と関心を有していた当代一流の学者であった。彼らの逞しい想像力をもってして、正規の地理学史に収まりきらないような地理的知の混淆の見られる雑種的な境界領域でこそ、地理学景観論を援用した鋭い社会評論が孵化できたのだと思われる。

さらに、三者三様の専門知識や思想的基盤をもつ彼らが共有していた認識のモードを解読するために、1930年代の各種景観論の流行やそ

の背後に広がる視覚的思考の広がりについて論じる。ミシェル・フーコー³⁾がエピステーメーとして論じたような、ある特定の時代を生きた人々にだけ暗黙のうちに共有され、時代の移り変わりによって全面的に覆され断絶する認識論的地平が存在するのなら、同時代を生きた同世代人としての彼らがまったく異なる視座から展開する社会評論のなかに、日本社会に対するどのような共通認識が見られるのか考察でき、さらに地理学景観論と社会評論との関係をより大きな観点から理解できるからである。

2. 日本近代地理学史における地理学景観論の評価

戦前期日本の地理学景観論は、日本地理学会の学会誌『地理学評論』(1925年創刊)を初めとする地理学のための学術雑誌が整った1920年代半ば以降、欧米からの理論導入が始まり、1930年代には一世を風靡する地理学理論となった。地理学は、地質学・生物学・人類学・歴史学などの隣接学科に比べ大学専門学科としての制度化や学会の編成が大幅に遅れた。この時期に、人文地理学という学科は急速に成長し、さまざまな分野に研究テーマを拡大していった。その際に、地層や遺跡を掘り返す地質学や考古学、文書や統計に依拠する歴史学や経済学とは区別して、地理学独自の研究手法として野外観察の徹底を求めた。これは、眼に得られない歴史や機能のようなものより、確実に観察記録を取ることのできる地表の形態を重視し研究対象を絞り込むことで、他学科には見られない独自の研究手法を構築し、地理学という新興学科の研究スタイルを保証しようとしたのである。地理学景観論は、地理学がようやくアカデミズムとして制度化される際に、まさにその土台を提供することとなった人文地理学の基礎理論だったのである。

したがって、当初の地理学景観論は、その対象とする分野が広く、地形・土壌・植生・気候に関する自然地理学の研究対象から、都市・村落・耕地・干潟・森林・砂漠・経済活動・文化・地図・写真に関する人文地理学の研究対象まで、

地理学が関与するほとんどの分野において景観が論じられた。もちろん、この日本における地理学景観論の隆盛は、概して先行する、もしくはリアルタイムに進展する、地理学者、オットー・シュリューター (1877-1959) などのドイツ景観論や、アメリカの地理学者、カール・O・サウアー (1889-1975) の景観論の輸入・模倣という側面が強いことは論を待たない。

この地理学景観論の実態については、岡田俊裕が『近現代日本地理学思想史』⁴⁾のなかで地理学内部における景観概念の理論的展開を総覧的に整理している。景観概念の意味は以下のように3分類できる。第一は地域の内容、すなわち特定地域において自然や人間活動による地理的現象が渾然と融和した総合体という意味である。第二は類型地域、すなわち気候や動植物分布などの主要な地理的現象から種別分類された地域という意味である。第三は地域の可視的形狀、すなわち直観的感覚的に把握できる地域の外観の意味である。これらのすべてに地域が含意されているのは、ドイツ景観論のLandschaft概念が可視的物体の総体とともに特定スケールの地域という意味を含んでいたためである。

また、この景観概念を活用して地理学者たちが取り組んだ景観研究は3つの方向に分かれる。第一は、景観を分析・総合してその土地の地域性を解明する自然科学的な景観研究である。第二は、自然景観から文化景観への発達史研究で、景観を分析し系統的に配列し直す歴史主義的な景観研究である。これは、Landschaftに刻まれた人類活動の痕跡について多面的な要因から説明するシュリューターの文化景観研究や、原始の自然景観が時間の流れのなかで文化の営力を受けて文化景観が形成される過程を追跡するサウアーの景観の形態学から強い影響を受けていた。第三に、景観をその地域の生産力や生産様式によって規定されると理解する社会科学的な景観研究があるが、この研究方向を取るものは少なかった。

このような広がりを見せていた戦前期の地理学景観論は、当初から批判にさらされていた。自然科学的な景観研究に対しては、まるで岩石を識別するかのように考察対象が観察できる景

観の外面に止まり分析方法が機械的であると批判された。また、歴史主義的な景観研究に対しては、サウアーの自然景観から文化景観への進化図式に見られるように超歴史的な自然要因を重視するあまり、社会経済的要因を捉えることができずかえって非歴史的であると批判された。このような批判に応えられず、地理学景観論は1940年代以後振るわなくなり、景観の記号論的解釈に可能性が見出される1980年代の再興の時期まで、地理学の基礎理論の座から外れることになった。

以上のように岡田が描き出した戦前期日本の地理学景観論の全体像からは、大地のみずみずしさを奪われ人々の生活を切り捨てた無味乾燥な土地の説明という印象を受ける。そもそも景観論は、人間の認識を前提にした知の編成手法のはずである。「何をどのように見る」のか。認識を問わないのであれば、「どこそこに何がある」という分布論で事は済むはずである。にもかかわらず、当時の地理学景観論の多くは本来認識論的問題構制であるものを存在論として、それも素朴唯物論として扱ってしまった。つまり、景観は唯物論的実在だったのである。したがって、この議論のうちに人間が景観から受ける感動や好奇心そのものが収容される余地はなくなってしまった。

このように日本近代地理学史のなかで評価されてきた戦前期の地理学景観論は、今日では地理学者にさえ顧みられることが少なくなっている。しかし、ここで筆者は、地理学理論としてばかり理解される傾向の強かった地理学景観論⁵⁾が、学問分野の境界領域という異種混濁的な場において社会評論としての独創的で興味深い洞察を導き出す重要な役割を果たしていた事例があることを強調しようと思う。

3. 辻村太郎の生態美観

当時の地理学景観論に認識を深く問う試みはないのか。実は人間的な意志を顧みることのない自然科学的な景観研究の親玉として岡田が厳しく批判した、辻村太郎の景観論にその試みを見ることができる。辻村は、日本地理学会の創

設に尽力し、また日本の大学専門学科としての地理学の創設者、山崎直方（1870-1929）の後を継いで東京大学地理学教室を主宰した地理学界のリーダーの一人だった。辻村は1923年に日本で初めて地形学の教科書⁶⁾を刊行し、自然地理学の体系化に大きく貢献すると、次いで当時未開拓だった人文地理学の体系化にも乗り出した。彼は自身が専門とする地形学の観察手法を人文現象の研究にも応用しようとした。その時に彼の論理武装を助けたのがドイツやアメリカの地理学景観論だった。彼は徹底した野外観察によって、地上における人間活動で満たされた各地の景観を客観的に記録し、分析し、体系的に総合する自然科学的な景観理論の構築に専念した⁷⁾。

しかし、辻村が、そのような景観論の実証科学体系化に尽力する傍らで、審美的な価値基準から景観論を組み立てた戦前期日本ではきわめて稀な地理学者でもあったことは、あまり強調されることがない。岡田とは異なり、辻村の景観論を肯定的に評価している西川治⁸⁾が、「辻村太郎…が地理学を通して求めていたものは人間性ではなかったろうか。彼は…文化景観の客観的記述を重視したが、それと同時に住民の心情、価値観、景観形成者の意図といった人間の心理面に立ち入って解釈することに共感を示した。また、地理学の対象のなかに美的なものに対して関心をもっていたこと、科学と芸術との統合を例証しえた稀有な学者であった」というように、辻村の景観論の視点は複眼的だった。辻村は景観論の理論的論稿では決して用いない美観や美感という概念を啓蒙的論稿や社会評論やエッセイで時折使用した。この概念を前面に出した彼の論文が「聚落生態美観」⁹⁾、「都市生態美観」¹⁰⁾である。

辻村は、「聚落生態美観」を書くに当たって、植物学者、三好学(1861-1939)の『植物生態美観』¹¹⁾から大きな影響を受けていることを、「此の本から感じた興味は実に新鮮であつて、今でも忘れることが出来ない」¹²⁾と告白している。それは、日本で初めて植物生態学だけでまとめられた単行本であり、植物個体の細密なエッチングや植物の織りなす特徴的な眺めの製版写真や色鮮やかな水彩画のリトグラフを数多くの散り

ばめた視覚的にも斬新な啓蒙書である。植物単体を研究する解剖学・生理学に対して、生態学は植物と環境および共に生活するものとの関係を論じる科学であり、植物を「群」として捉える視点である。

三好はこの植物群落の現象を説明するために、聚落・部落・社会という人間集団のアナロジーを用いるほかに¹³⁾、風景・景観という概念を使い始めた。そして三好は、

緑の葉、紅の花は色と形とによつて植物体の美を現はし、春の野、秋の林は季節の変化に伴ふて植物風景の美を示して居る、其他一々の草木、苔、菌、藻草の類に至るまで所生の境遇と外圍の關係とによつてそれ々固有の形態と美観がある、それで今植物界の真美を知らうとするには、一種の理想または詩情から見ればかりでなく、第一植物の生活の状態即ち其生態に照らして観察しなければならぬ¹⁴⁾

という観点からこの著書を著したのである。その後、三好は『日本植物景観』¹⁵⁾という植物図鑑を公刊し、また植物景観の概念がVegetation Ansichtenの訳語であり、それが植物区系と植物群落から構成される点を明らかにしている¹⁶⁾。植物区系とは6,500万年前の第3紀に地球上の地形が整って以来、長期にわたってつくられてきた植生の体系のことであり、植物群落とはその土地固有の気候や土壌に適應してできた植物の群体のことであるから、三好は植物景観を長大な時間の流れと局所的な環境の個性とが交わるところに生成されるものと考えていたことになる。また、三好のいくつかの文章¹⁷⁾を検討すると、地域全体の印象的な眺めとしての「風景」に対し、その構成要素としてある種の植物を群体として把握するために「景観」という概念を使い分けているようである。三好は、長い年月をかけて作り出された個々の植物と周囲との複雑で微妙なバランスのもとにある関係性の相を傷つけずにそのまま取り出す認識装置として、景観や美観の概念を活用したのである。

これに対し、辻村は景観(Landschaft)の調和を論じる地理学者が多いが、結局そこには

視覚による美醜の判断が働くと判断し、科学的に対象を観察して合理的な関係を見出したときの満足を「美感」、対象の形態と機能が複雑に混合して構成される美感を促す眺めを「美観」とした。この概念化された評価尺度に基づき、辻村と佐々木彦一郎¹⁸⁾は「都市生態美観」において横浜・名古屋・大阪・甲府・静岡・高山の6都市の景観を評価した。そのなかで最も評価が高いのが大阪である。その論拠となったのは、大阪の力強い経済活動の表れが大阪を形づくる建造物群と見事に調和しているという点であった。たとえば、

不思議な事には此等〔同業者町〕は決して近代的建築物に非ずして古典的建築なる事である。…これは全体から受ける一つの統制的美観とも云ふ可きものであらうか。黒き塗籠め、屋根の裾、塗格子等の建築は実に堂々たる装ひを持つて居るが、それが古典的弱さを伴はないのは建物自身だけの力でなくて、寧ろ家に入出入する人々の頻繁さ、街路上の右往左往、又商品を街路上に積上げて居る賑はしさ等が点景と為つて、その建築の形式の古さをして衰退的な文化表徴たらしめず、却つて重厚なる都市性格を示す結果と為つて居るためである¹⁹⁾。

近代的建築物に関しては、次のような評価が見られる。

瓦斯会社の大建築は大阪の建築物の一偉彩なりとの事であつたが、孤立して存在して居るので、却つて周囲のものとの調和が採れず、先駆的建築物としての新味はあつても、都市美観としては「群」が重要な素地である²⁰⁾。

辻村と佐々木は、大阪において近代的建築物と伝統的建築物が対立せず調和を保っていることに感銘を受けている。彼らはどちらの建築物も質的に優れているうえに、人々の活発な活動が重厚な都市機能を示して両者の均衡を保っていると解釈した。ここで、辻村らが「美観」として高く評価したのは、全体としての統制であ

り、「群」としての建築の調和、つまり形態としての関係性、さらには人々の活動を介してそれらをつなぎ合わせる経済機能の関係性が調和のとれた円熟した相を示していることなのである。

ここに辻村の景観論がもっていた、厳密な地理学基礎理論を構築するという学科内部での目的のほかに、その中心課題の周縁で、当時の世相に対する社会評論としての目的があったことを理解できる。つまり、伝統的に維持されてきた社会機能の調和を崩すことなく近代的な経済機構や生産技術を人智でもって見事にそのなかに組み入れていく、そうした方法を案出することが緊要である²¹⁾。だからこそ、地理学景観論は、形態変化に注目しながらもそれに暗示される生態的意義を補足しようとする知識人によって完成されるべきである²²⁾。また、景観の価値判断の能力を養なうのも、このような社会的課題を熟知している地理教育家の任務であるというのである²³⁾。

4. 石原憲治の風景計画

東京市建築技師の石原憲治は、都市計画理論家、民家研究家、前衛建築運動家という三つの顔をもつ個性的な研究活動家であった。彼の考え方はキリスト教精神に基づいていて、終戦後は神学校に通い戦災スラムの支援活動を起こした。石原が地理学景観論に関心を寄せたのは、地方計画のあり方を問う「都市計画より土地計画まで」²⁴⁾と、都市美概念について考察した「文化景観としての都市美」²⁵⁾においてである。

石原は、建築技師でありながら全体性の思想ともいふべき興味深い独特の文明観をもっていた。

生命を認識するためには我々は先づ何よりも現代の分化組織による文化の圏外に身を置かねばならない。…私は今日の一切の問題が此の分業、分化、乃至専門的職業制度に基いて居るものだと云ふ事をつくづく考へさせられずには居られない。…如何に宗教によつて人類の同胞を説いた所でどうして此の別な世

界の人が理解し、相愛する事が出来得やう。…あゝ斯くの如くして人間と人間とは終に理解の出来ない別々の世界の住民になつてしまつた²⁶⁾。

私の謂ふ所の全体的価値生活は私の理想である。ユートピアである。…私の全体的価値生活…では鍬を土に打ち下す事が同時に宇宙との全体の調和であつて、宗教生活であり、芸術生活であり、経済生活であり、労働生活であり、道徳生活であり、科学生活であり一切であるのである。それ自体のなかに一切の価値を包含して居るのである。それ故に此の全体的生活に於いては其の生活の如何なる断片と雖も皆同様の価値をもつて居る²⁷⁾。

彼は、全的人間生活が分断された近代分業社会の状況に絶望し、そこで困り込まれた偏狭な人間の自我を否定して、分業組織の圏外に身を置くことを求めた。そのとき、この地上にあって神を求める強烈な生命の要求に身を委ねることが可能になり、人間生活の全体性が回復される契機を導き出すことができると考えた。そして、「私は世界に於て最も偉大なる解放者たる「彼」の十字架の死の深き意味を知る者である」とキリスト教信仰を告白する石原は、この回復が祈りと聖霊による労働を通して神の自我として完成されると結んだ²⁸⁾。

この宗教的観点から、石原は文化の意義を問い、それぞれの時代生活の根幹になる民衆生活に注目するよう主張した。

文化とは所謂文であり華であり時代生活の精髓であり表象であつて、且つ時代生活の最も高き価値である。…然して時代生活の精華と値踏を成るべく高く見積らうとした結果最も美しい所を採つて以つて時代の文化としたのである。…斯様な文化の標準の取方の結果は常に文化が民衆の生活からかけ離れたものになつて居た…それは唯鉄屑の如く表面乃至上層に浮かんだ英雄と宮殿と貴族と彼らの玩弄物たりし文化の記録ではなかつたか。…抑文化の本質的意義乃至要求は如何と曰ふに、私は是に答へて文化とは民衆生活の全体的価

値也と云つて見度いと思ふ²⁹⁾。

この文明観・文化観は石原の建築・都市思想の源泉でありつづけた。石原は建築学者たちの手がけることの少ない伝統的な民家の研究に勤しみ、また前衛建築によって庶民のための住宅とは何かを追い求め、さらに住宅営団では実際に国民のための住宅供給に尽力した。そこで、彼は建築家の使命について次のように言う。

来る社会では、一人一人の虚栄のために、一人一人の建築家が設計することは、社会的悪として、排斥せられるであらう。建築家は、社会の幸福のために、全体の幸福のために、都市を、村落を、地方を、設計するに至るであらう。…全体の群としての、建築を設計するであらう。一軒一軒のファサードは問題でない。スケールは拡大された³⁰⁾。

興味深いことに、石原の全体性の思想のなかで建築家が社会的使命として設計すべきものは、辻村らが植物生態学に基づいて評価した「全体の群としての建築」そのものなのである。石原と辻村は専攻分野も社会的立場も思想的背景もまったく異なり、1937年の第1回全国都市美協議会にともに参加するまでに両者の接点は見出せない。この奇妙な一致はどこから来るのか定かではない。

このような論理展開のなかで、石原は景観に対する自らの認識のモードを定める。彼は、人間生命の価値判断に基づく合理性と「群」としての建築との一致を美観の要因とした。このような建築・都市論を展開する石原は、地理学者、小田内通敏(1875-1954)の論文³¹⁾を介してシュリューターやサウアーの進化論的な景観論に着目した。それらを通じて石原は、過去における歴史的動向が蓄積した環境である都市というものを今ここで全一体として認識するためには、原始景観から文化景観へと進化する景観概念を取り入れるのが正当であると考えに至った³²⁾。石原の思想において、生命の求める選択によって、例えば何を食べれば健康に生きていけるのか、あらゆる生命体が選択し続けることで、宇宙は無限に進化するという生長率の考え

方が重要であった。進化論的に全体調和が約束されるといふ文明観を奉じていた石原は、サウアーの景観進化図式に直ちに共感したものと思われる。

そして、この図式によって、環境としての都市が人生に及ぼす価値を評価しようと考えた。石原は都市の景観を次のように位置づけた。「都市の風景はその都市の地的環境と人的加工との共同作業の結果出来るものである。…此の風景は…土地の自然的風景と、之に働きかける文化的風景との総合として表現せられるものであるから、風景こそは土地の上に於ける人類生活の決算である」³³⁾。つまり、彼は都市の景観にまさしく彼が長年追求めてきた全体性を実現する指標として「人類生活の決算」という究極的な評価を与えたのである。

そこで、サウアーが言うように、

風景が一つの地域的実在であるとするならば、一つの地域的計画なるものを私は風景計画と呼ぶことが出来るであらう。そうだ、風景計画こそはあらゆる土地の上に於ける人類文化の最後の価値を決定する所のものでなくてはならない。是を私は又土地計画と呼ぶことが出来ると思ふ。是は土地の上に於けるあらゆる人類の工作と計画との総合であるからだ。此の為に私は新しき地理的精神を都市計画乃至地域的計画の中に導き入れることの急務を感ずるものである³⁴⁾。

このように地理学景観論の考え方を参照することで、ある地方の自然も人工物も「群」として全体として扱う風景計画は、石原にとって「人類文化の最後の価値」を決定するものとなった。1930年代に入って今まさに地方計画・国土計画に当たろうとしていた都市計画技師³⁵⁾の石原は、自らの仕事こそが民衆生活を豊かに変えるものだと信じ、それに大きな期待を抱くこととなった。それとともに、彼は自身の建築・計画思想の根本をなす文明観をさらに確かなものへ発展させるために、地理学からの有意義な助言を期待していたように感じるのは筆者だけだろうか。

5. 城戸幡太郎の教育景観態

城戸幡太郎は、科学的心理学の創始者であるドイツのヴィルヘルム・ヴント (1832-1920) の民族心理学から強い影響を受け、戦前期から言語・信仰・神話・芸術・ジェンダー・学校教育・幼児教育など幅広い分野にわたって精力的な研究活動を展開していた教育心理学者である。ヴントは実験を重視する近代心理学の創始者であるが、同時に土地に根ざした有機的文化を称賛する19世紀ドイツ的なロマン主義思想の持ち主でもあった。そのため、ヴントは、実証科学としての個人心理学のほかに、個人が無意識に伝承・発達させる民族心理を読み解く民族心理学が双璧として確立されなければ、人間心理を解き明かす科学体系としての心理学は完成されないと考えていた。ヴントの考えにしたがう城戸も、心理学研究を通じて日本民族の発展を強く意識する日本文化論者でもあった。そのような研究を繰り広げる城戸が地理学景観論に関心を寄せたのは、雑誌『教育』の地理教育特集号に発表された「教育景観態」³⁶⁾においてである。

城戸は、ヴントの民族心理学が個人精神の類推として、つまり発達の法則において民族精神を捉え、あたかも民族精神を超個人的な客観的実在のように論じたのは誤りであると批判し³⁷⁾、心理学における民族文化の要因は個人精神の形成過程のなかでしか研究できないと主張した³⁸⁾。言い換えれば、個人精神も民族精神も、結局のところ、実際の生活のなかで複雑に結合した人間の意識から一定の方法で抽象したものに過ぎず、個人の好き嫌いは個人心理の問題に収まらず、知らず知らずに社会的価値を含んでいるものだという。この城戸の人間心理の洞察は、今日の批判理論においてアイデンティティ・ポリティクスを論じる社会構築主義の観点を先取りするものとして注目される。

そしてこのヴント批判を端緒として、城戸は心理学や社会学の認識論を検討した³⁹⁾。それによれば、物理学が扱う世界が時間軸を吸収した空間軸的認識に基づくものであって、物理学者は同時的共存の関係からあらゆる物理現象を説明する。これに対して、心理学が扱う人間が経験する現実世界は、空間軸を吸収した時間軸的

認識としてしか存在しない。原因としての過去から見れば現実の経験は「結果」として説明され、理想としての将来から見れば現実の経験は「価値」として認識される。時間が進んで、認識の出発点となる現実の経験が積み重ねられるにつれて、当然ながら原因も理想も移り変わっていくような代物である。

したがって、価値の発展として経験される現実の理想化＝理想の現実化を重視するならば、この現実の経験の場を批判的に統制することが民族文化の発展に大きな意義を持つことになる。この経験の場、人間の生活場面を城戸は次のように説明する。

われらの生活するこの現象の世界は、世界と人間との関係がわれらの意識として表現されてゐるのである。われらはこの意識を通じて逆に世界と人間とを認識しようとする。われらが世界観と称し人生観と称するものはわれらが意識を通じて世界と人間とを再認識したところの、われらの自覚である。そしてこの自覚はわれらの生活によつて世界と人間とを造りかへてゆく行動としてあらはれる。世界像とは…、観念形態としての世界観をわれらの行動によつて造りかへた生活形態であり、人間像とはこの生活形態としての世界像を形成して行くわれらの行動形態である。…人間像が単なるアイデアとして観念されるものであれば、それはわれらの生活即ち生命の「いとなみ」から超越するものであり、生活力の根源として美しき世界像を彫塑して行くことはできないのである⁴⁰⁾。

つまり、城戸はこの具現化された生活場面を、観念としての世界観や人生観を生活に根づいた世界像や人間像に変換し、それらを生活力の根源にできる場だと考えた。学校などで知識として与えられた世界観は、生活場面における実際の日々の経験を通じて咀嚼されて世界像となり、また読書などを通じて知り得た人生観は、毎日の生活場面を生き抜く行動を積み重ねて人間像となる。この現実の経験の場を自覚し、批判的に統制することで、自我が発展し、人間生活が改造され、文化が変革されるのである。

ここにこそ、教育の使命がある。

このような認識のモードから、城戸は「教育景観態」論文において景観概念について論じた。すなわち、城戸は教育景観態という考え方がドイツの人類学者、レオ・フロベニウス（1873-1938）の言うパイデウマ⁴¹⁾やドイツの地理学者、ジークフリート・パッサルゲ（1867-1958）の文化景観態⁴²⁾の一つとして、発展していく一つの有機体と考えた。そして、地理学景観論を批判して次のような景観の考え方を提唱する。

景観を地理学の対象として問題とする場合にも、…自然景観と文化景観とに区別されるのは、地理学そのものの方法がまだ抽象的分析に墮してゐるからである。地理学がわれわれの地理学である限り、それが対象とするものはわれわれの生活と無関係に考へることはできぬ。自然が特種の景観としてわれわれに展望される限り、それはわれわれの或る立場から眺められた景観である。われわれが如何なる立場から眺めるかによつて自然の景観は異つてくる。…地理学はかゝるわれわれの立場から観察された学問である限り、それはわれわれの立場を超越した対象を求めることはできぬ。…地理学における景観は人間の生活する場所としてそれには常にわれわれの立場が導入されてゐる。而してわれわれの立場はわれわれの社会生活において形成されたものであるから、一定の立場から眺められた景観はそれぞれの社会生活を反映した一定のイデオロギーである。従つて地理学は単なる宇宙物理学とは異つて、常に特種な景観を問題とするイデオロギーとして発展してゐる⁴³⁾。

ここに多くの説明は要しないが、城戸は日本の文化を発展させていくためにきわめて重要だと考える人間の生活場面が景観として表れると気付く、景観概念を彼の思想に結び付けた。「景観は或る生活者によつて表現された生活環境の意識である。従つて景観は生活意識の表現であり、生活意識のうちには明かに生活するものの生活要求が認められねばならぬ」のである⁴⁴⁾。

また、景観には経歴や社会的地位のような

人々が生活場面で背負っているさまざまな立場が含みこまれていると考えた。したがって、一定の立場から眺められた景観は、しばしば抗争場面を暴露する。郷土教育が叫ばれている教育現場⁴⁵⁾は、実のところ地主と小作人の闘争の場面となって混迷した教育景観を晒している。「文化の発展といふことはかゝる意味において文字通り生活場面の開拓である。…われわれの地域的景観の性格には消極的方向への誘発性を有する場面が多い。教育はかゝる場面に向つて生活者の行動を転向(Umweg)せしめるよりも、かゝる場面を変革して新しき場面を発展せしめるための力を与へねばならぬ」⁴⁶⁾。地理学は「景観の現象学的記述」に取り組む一方で、「その発生的説明」に従事して、「一つのイデオロギーとして一定の地域社会のうちに表現される」教育景観態を経済地理学・政治地理学の問題として解明すべきである。地理学は私たちの生活場面を変革する技術の研究であるべきだと言う⁴⁷⁾。

城戸がこの小論文のなかで提唱した地理学景観論の取るべき論点、つまり景観は立場や背景の異なる人々には別々のものとして現象し、それぞれの景観は彼らの立場を反映するイデオロギーとみなすべきだという論点は、今日の地理学先進社会である英語圏諸国においても、1980年代に入ってからようやく本格的に展開され⁴⁸⁾、今日隆盛をきわめる批判地理学の基礎の一つになったのである⁴⁹⁾。そのことを顧みれば、1930年代に地理教育に関して提起された城戸の問いかけがいかに斬新であったかを知ることができる。しかし、筆者は地理学者が城戸のこの論文に論及した事実を今日に至るまで知らない。恐らく、彼らは地理学景観論の伝統からこぼれ落ちた城戸の独創的な景観論に異質なものを感じ、これを無視したのであろう。当時の景観論を奉じる地理学者たちは、欧米の地理学理論の摂取に気を取られ過ぎ、身近な隣接学科の日本人学者からそっと重要な提案がなされていることに気づくことができなかつたのである。

6. 1930年代の視覚的社会の到来

以上のように、専門学科も思想的立脚点も異なるこの3人の学者たちは、地理学の基礎理論として元來世俗社会から切り離された純粹にアカデミックな真理追究のために構築されていたはずの地理学景観論を柔軟に活用して、きわめて独創的な社会評論を提示した。興味深いことに、彼らは1890年代前半に生まれ1980年代前半に亡くなるまでほとんど同じ時間を生き抜いた同代人であった。そして、彼らは1930年代前半という同時期に、地理学景観論を本来の脈絡からずらす形で利用して、日本の社会に鋭いまなざしを向けたのである。何と興味深い一致であろうか。

1930年代は、先述の通り地理学景観論がたいへん盛んに論じられた10年間である。さらに興味深いことに、同時代に地理学の学科外でも多様な景観論が活発に展開されていた。建築家や都市計画技師が中心となって1910年代より展開されてきた都市美観論は、政治的プロパガンダや行政施策としても活用され、1930年代にはその絶頂を迎えていた。雑誌『国立公園』(1929年創刊)や雑誌『風景』(1934年創刊)には、地質学者や生物学者などによる大自然や郊外の景勝地の風景保全を求める論稿が数多く寄せられ、新聞社による景勝地選定は国民の熱狂を誘った。こうして国民の間に広まった景観の近代的制度化を求める風潮を批判して、民俗学者、柳田国男(1875-1962)が近代化する庶民の生活場面を論評する、独自の風景論を展開したのも1930年代であった⁵⁰⁾。

このように1930年代には、さまざまな立場から景観や風景が議題に挙げられていた。当時の論客たちが争うように景観や風景を語ろうとする、語らざるを得なくなった。その要因として、1930年代日本の社会問題があるはずであり、またそれらを受け止める知識人たちの認識上の問題が潜んでいるはずである。この問題に関して、筆者はこの時代の科学技術の発達によって日本人に親しみ深いものとなったいくつかの機械装置によって、日本人のなかにある新しい思考様式が流行したことが、この社会現象の根底にあると考える。

この時代を特徴づけるその思考様式として提起したいのは、ルドルフ・アルンハイム⁵¹⁾のいう視覚的思考である。アルンハイムは知覚を思考の劣位に対置する西洋思想のロゴセントリックな二元論的構図を批判して、視覚とはそれ自体が思考であり、人は視覚によって考えると論じた。人は個物をその唯一性によって見ているのではなく、物をその種類、種間の差として、その一般性によって見ている。言い換えれば、人は常に関係性のなかで物を見て、その構造特質を連続的な系列において捉えている。視覚において人はすでに問題解決に至っているのである。

ヴィレム・フルッサー⁵²⁾によれば、この視覚的思考の卓越は、人類文化が始まって以来経験してきた2つの根源的な分岐点の1つによって生み出されてきたものである。第一の分岐点は紀元前2,000年代半ばの線形文字の発明であり、第二の分岐点は20世紀以来のテクノ画像（近代科学技術の粋を集めた機械装置によって制作された画像）の発明である。第一の分岐点は、人類に概念的思考を発達させ、その抽象作用によってすべてのものが意味で溢れかえる魔術的な画像世界から人類を解放した。しかし、複製技術の発達により書かれた文字の溢れた19世紀には、テキストが画像を押しつけてしまい、人間がテキストをイメージ化できなくなってテキストの機能の一部に組み込まれてしまう事態が到来した。雑然たる意味に満たされた具体的な人類の世界や歴史は、その究極まで概念化をこうむり、もはやイメージしがたい相対性理論の方程式やマルクス主義の抽象的な歴史観に置き換えられた。そこに生まれるのは、偶像崇拜に劣らず幻覚的なテキスト崇拜なのである。この人類文化の危機のさなかにテクノ画像が発明された。この危機を克服するために、テクノ画像は再びテキストをイメージ化し、概念を画像化する歴史的転機になった。今日の報道は、記事が映像を説明するのではなく、映像が記事を図解する転倒が生じ、そこに魔術的な意味世界がよみがえったのである。

フルッサーが最初のテクノ画像として重視する写真は、1890年代以降、小型カメラの発売によって素人でも撮影できるものとなり、日本の市民にも少しずつ親しまれるようになっていった。しかし、海野弘が明言するように、1920～30年代になって「メディアとしての写真が新しい段階に達したと考えることもできる。…印刷された写真が、雑誌などを通じて、それまでとは比較にならないほど大量に複製されて、広まっていった」⁵³⁾のである。

精巧な写真製版印刷技術が日本に導入されたのは1880～1910年代で、1880年代末から画報形式の雑誌も発行され、とりわけ日露戦争をきっかけに1900～1910年代に盛んに創刊された⁵⁴⁾。しかし、1930年代になると印刷技術は高度に洗練され、あらゆる印刷物の誌面は自由なレイアウトで挿入された写真画像で溢れるようになった。こうした写真製版印刷を踏まえて、1930年代には機械的な構図のうちに社会生活の諸相を捉える新興写真や、組写真を巧みに用いて複雑な思想すら大衆に伝達する報道写真の理念が生まれ⁵⁵⁾、科学技術の進歩とともに速度を上げていく社会活動の一瞬一瞬を切り取って誌面に貼り付け大量頒布する写真画像生産が展開された⁵⁶⁾。

写真と双璧をなすこの時代のテクノ画像として映画がある。日本における映画の初放映は1896年である。それ以降、技術的に興行的に発展を続け、とりわけ映画監督、帰山教正（1893-1964）が映画を見世物や演劇の模写ではなく独自の画像芸術として撮影技法を獲得すべきだと説いた1917年頃から上演作品数が急増した日本の映画は、1930年代に戦後の1950年代に並ぶ最初の全盛期を迎えている⁵⁷⁾。

ベラ・バラージュ⁵⁸⁾によれば、映画のなかでは精神も理念も概念も、俳優のセリフ以上に身振りや表情、さらにはモノや風景によって象徴的に暗示伝達されるようになった。文化は抽象的精神から可視的肉体に表現の場を移した。表面芸術としての映画では、文芸作品のもつ抽象的思考や時間を飛び越える想念をも、同時的

映像のなかに映り込む形態だけで表現する必要があり、照明やカメラワークの撮影技法が次々に考案されていった。1930年代に人々はこのような表現法を備える映画を好んで享受し、画像に秘められた象徴的物語を解説し共感する視覚的思考を磨き上げた。

1930年代は大衆旅行が日本社会に浸透した時期でもある。外交上の観点から外国人観光客の日本旅行を斡旋していたジャパン・ツーリスト・ビューローは、1925年に日本人観光客に門戸を広げ、その後たちまち経営を拡大していった。1930年代までに全国に整備されていた鉄道網と宿泊施設を使って、移動にともなう危険や苦勞の取り除かれた、楽しみのための旅行が大衆化していった⁵⁹⁾。その結果、日本各地に繰り出した旅行客は、鉄道の車窓に飛び去る風景をパノラマ風に見やる視覚的態度を身につけ⁶⁰⁾、目的地に深く係わることなく快適な観賞行為の後、足早に去っていくのである。

1920年代には、日本においても民間航空輸送が黎明期を迎え、他方で陸軍陸地測量部では空中写真撮影の研究を進めていた。戦前期にあつて、航空機に搭乗できた人々はまだ限られていたが⁶¹⁾、さまざまな空中写真が写真製版印刷によって多くの人々の目に止まるようになっていったのも1930年代の出来事である⁶²⁾。

以上のように、1930年代は、科学技術の発達を受けて新しい視覚装置が登場し、それに適応する新しい視覚的思考・視覚的態度が人々のうちに培われていった時代であった。各種景観論はそのなかからジャーナリズムやアカデミズムの言論界ににじみ出てきたものとも考えることも可能である。このような言論界における各種景観論と1930年代社会の問題との関係を緻密に論証することは、この小論の能くするところではない。しかし、辻村、石原、城戸の三者がこの時代に地理学景観論を用いて都市や農村の社会相を批評した根底にある認識のモードを探ることで、この大きな研究テーマの一つの手掛かりを求めよう。

7. 社会評論としての必要条件

辻村、石原、城戸の三者の共通項は何か。辻村は、三好の植物生態学より群としての植物が環境に対して悠久の時間をかけてつくり出した関係性の相を解説する視点を獲得し、類推を通じて大阪に見られた全体としての統制、群としての建築の調和、経済機能の円熟した関係性の相を美観として評価した。石原は、キリスト教精神に基づく自らの全体性の思想において人々が近代自我を脱して調和のとれた全的人間生活を回復するため、演繹的論法から民衆生活の全体性を重視し、また進化論的に約束される全体調和を目指して、群としての建築、さらには自然と人工物とが織りなす群としての風景の設計を志した。城戸は、ヴントの民族心理学を批判し、個人精神の帰納的考察から人間の具現化された生活場面こそ民族文化の発展を決定する生活力の根源と考え、見る者の立場の違いから抗争場面と化している子供たちの生活場面を変革することこそ教育景観態の発展を約束すると論じた。

彼らが三者三様の論拠や論法を通して提起したきわめて個性的な論点のなかから共通する視点を抽出してみると、全体や総合、進化や発展、調和や円熟、群や関係性や有機体、相や場面といった似通った概念がいくつも並ぶことになる。三者はそれぞれ植物生態学から都市を、キリスト教から地方を、民族心理学から農村を観察していたが、結果的に論法ばかりか地理的に性質もスケールも異なる対象に対して類似した認識のモードへとたどり着いた。ここに地理学景観論の社会評論としての可能性が秘められていたのではないか。

そこで、関係性という概念を軸に三者の共通項を整理するならば、まず三者が批評の対象にしてきた個々の建築物や人々の活動は、同時的空間に広がる群や全体と密接に関係し、また時間系列上の過去や未来とも進化を通じて関係するものと認識されている。その空間-時間的な関係性の収斂する焦点に位置づけられている批

評の対象は、それ自体、相や場面という視覚的総括を表す概念によって捉えられている。そして、その対象が有するそれぞれの関係性こそが評価項目になり、その評価尺度は調和や円熟の程度となっている。

このことから、1930年代において地理学景観論のもつ進化論的理解と生態学的理解が社会評論としての有効性を保持していたことがわかる。進化論的理解は景観の発達史研究によって議論の深まりを見せていたが、生態学的理解は辻村の提唱⁶³⁾以外にはさしたる成果がなかった。戦前期に地理学景観論が社会評論として発展を見るためには、生態学的な景観理論の構築が必要だったのである。

しかし、地域の実在を表す調和景観は地理学方法論に属する概念であったが、なぜ社会評論の評価尺度が調和であり円熟であったのか。おそらく、その尺度は1930年代の社会相の裏返しであり、喪失していたものだと思われる。この時代、人々はそれまでに自ら養ってきた思考や感性の許容量を超える多種多様な物事の共在混成や、その急速な変動に直面していた。だからこそ、絶え間なく変移する大量の事象を一目のもとに補足し、一瞬にしてその種間の差異を析出し、個々の構造特性を系列化して理解させてくれる視覚的思考は重宝された。この時代に新しい視覚装置を通じて視覚的思考が広まったのも、単なる科学技術への適応ではなく社会相への適合があったからではないか。

視覚的思考の特徴である俊敏な大容量の右脳的情報処理こそが景観論の強みであるならば、戦時中の思考の硬直化に際してあらゆる景観論は思考を増殖させるノイズの発生源として封殺されたと考えられるし、戦後の地理学が地域論へ、空間論へと抽象度を高める一方で景観論をなおざりにしてきたために、柔軟性を失い現代社会についていけなくなったのも道理である。

今日の地理学景観論において、進化論的理解は疑わしいものの、生態学的理解は今なお有効である。今後、地理学景観論が社会評論として役立つためには、複雑さの度合いを増す一方の

社会事象を明晰に構造化する関係分析の理論構築に邁進する必要がある。個々の事象を節合する論理としてグローバルな政治経済理論から文学理論・精神分析まで幅広く学ぶ必要がある。同時に、調和や円熟ではもはや収まり切らなくなった評価尺度はどこに置くのか。それは、今まさに問題が生じている数多くの場面を精力的に地道に観察しながら探るほかなかるう。

注

1. 西部均「日本における景観論／風景論—学際的な議論の構図—」（加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房、2006）、pp. 164-179。
2. 例えば、歴史地理学者、金田章裕が2005年の文化財保護法改正にともない議題になっている文化的景観の概念について学際的な場で論じている。金田章裕「文化的景観の概念と意義」季刊まちづくり11、2006、pp. 20-21。
3. フーコー、M.(渡辺一民・佐々木明訳)『言葉と物—人文科学の考古学—』新潮社、1974。
4. 岡田俊裕『近現代日本地理学思想史—個人史的研究—』古今書院、1992、pp. 178-241。
5. 社会評論としての地理学景観論の役割を論じた例外として、横山秀司「辻村太郎の観光地景観論について」商経論叢45-3、2005、pp. 151-167がある。
6. 辻村太郎『地形学』古今書院、1923。
7. その代表的な成果として挙げられるのが、辻村太郎『景観地理学講話』地人書館、1937である。
8. 西川治「辻村太郎の地理学研究法」地理学評論58A-2、1985、pp.104-105。
9. 辻村太郎「聚落生態美観」地理教育創刊十周年記念第三増刊、1935、pp. 1-16。
10. 辻村太郎・佐々木彦一郎「都市生態美観」地理教育22-1、1935、pp. 9-25。
11. 三好学『植物生態美観』富山房、1902。
12. 前掲9)、p. 1。
13. 例えば、三好学『植物社会』富山房、

- 1903。
14. 前掲11), pp. 1-2。
15. 三好学『日本植物景観—日本野生植物培養植物及び植物風景ノ写真画集並ニ解説—』丸善, 1905-1914(全15集)。
16. 三好学「植物の景観」理学界3-10, 1906, pp. 1-4。
17. (1)前掲15)。(2)三好学「十和田湖の景観」学芸40-502, 1923, pp.2-14。(2)三好学「十和田国立公園の景観」国立公園8-3, 1936, pp. 4-7。(3)三好学「日光国立公園の景観」国立公園6-12, 1934, pp. 5-9。
18. 経済・集落地理学者である佐々木彦一郎(1901-1936)は、家屋形態の配置に鋭い分析力を見せているが、表立って景観論に与していない。しかし、佐々木は辻村に比肩する景観観察力・描写力を持つ研究者であった。
19. 前掲10), pp. 18-19。括弧内・下線筆者記入。
20. 前掲10), p. 21。下線筆者記入。
21. 辻村太郎「風景の改善」風景2-2, 1935, 28-29頁。
22. 辻村太郎「地理学的景観」地理教育16-2, 1932, 1-6頁。
23. 辻村太郎「田園景観の育成」地理教育23-6, 1936, 1-15頁。
24. 石原憲治「都市計画より土地計画まで」建築と社会16-9, 1933, pp. 1-5。
25. 石原憲治「文化景観としての都市美」(全国都市問題会議編『第四回全国都市問題会議総会7議事要録』全国都市問題会議事務局, 1935), pp. 253-262。
26. 石原憲治『全体性の回復—文明に贈る—』厚生閣, 1924, pp. 4-13。
27. 前掲26), pp. 42。下線筆者記入。
28. 前掲26), pp. 91-93。
29. 前掲26), pp. 24-27。
30. 石原憲治『都市建築造形理論への考察』洪洋社, 1929, pp. 44-45。
31. 小田内通敏「風景形態としての都市—一般人文地理学的考察のために—」(人文地理学会編『都市地理研究』刀江書院, 1929), pp.3-8頁。
32. 前掲25)。
33. 前掲24), p. 5。
34. 前掲33)。
35. 日本の都市計画制度は1919年の都市計画法の成立をもって本格的に始動した。市街地の総体的コントロール技術である欧米の諸制度を模範とするこの制度は、郊外にまで用途地域制を設定するなどして都市の機能分化を促進し、深刻な都市問題を予防しつつ効率的な活動を保証する大都市を建設しようとするものだった。法制化から間もない1923年に発生した関東大震災の復興計画において、都市計画技師が急遽増員され本格的な計画実務を経験することになった。その後、彼らは各地方庁に散らばって、1930年頃までには都市計画技師という一定の職能集団を形成するまでになった。その頃になると、都市化のさらなる進展に対応して、また1924年の国際都市計画会議の提案を受けて、都市計画の対象は都市から大都市圏、地方、さらには国土全体へと広げられていった。
36. 城戸幡太郎「教育景観態—教育地理学の問題—」教育1-3, 1933, pp. 301-309。
37. 城戸幡太郎「聯想及び想像の民族的研究—主としてト筮発達の方面より観たる考察—」心理研究12-2, 1917, pp. 150-172。
38. 城戸幡太郎「心理学に於ける民族的研究の方法に就いて—聯想及び想像の民族的研究, その二—」心理研究12-5, 1917, pp. 501-523。
39. 城戸幡太郎「社会学的認識に於ける説明と理解と批判」社会学雑誌28, 1926, pp. 16-32。
40. 城戸幡太郎「世界観と人間像」教育9-9, 1941, pp. 867-875。
41. パイデウマ(Paideuma)とは、世界人類の文化史を構築しようとしたフロベニウスが発案した文化形態学の用語である。文化形態学において、文化は有機体と考えられ、その成長源としての生命体がパイデウマである。そ

- れは、人々の心を捕らえて興奮状態のうちに文化を誕生させる、文化形態の決定要因である。
42. ここで城戸がパッサルゲの文化景観態として取り上げている概念は、正確には何を指しているのか不明である。パッサルゲは主に気候と植生に基づき世界を体系的に景観帯(Landschaftsgürtel)に分類し、人間活動による文化景観の景観帯との対応関係を比較考察し、文化の発達段階を論じているため、城戸はこのようなして類型化された文化景観を指し示したのではないか。パッサルゲ,S.(佐藤弘・国松久弥 共抄訳)『景観と文化の発達』古今書院, 1933。
43. 前掲36), pp. 301-302。
44. 前掲36), p. 303。
45. 郷土教育は、画一的教育を打破して身近な郷土で見聞きするものから児童に洞察力を獲得させようとする教育実践である。ドイツの郷土学(Heimatkunde)などの教育思想から影響を受けた日本の初等教育では、1880年代より1945年に至るまで郷土教育は形を変えながら連綿と受け継がれていった。とりわけ、1930年代前半には、世界恐慌によって荒廃した農村を建て直す自力更正の精神を育むために、文部省が師範学校に郷土研究施設費を補助するなど振興策を打ち、一方で、地理学者、小田内通敏が中心となって郷土教育連盟を組織して言論活動を活性化させたため、教育界に郷土教育ブームを巻き起こした。しかし、郷土教育の土台となるべき郷土研究が未熟だったため、教育現場の教師たちがならうべき確固とした研究手法を提示できずにいた。その後、郷土教育は戦局の拡大につれて愛国心涵養という思想誘導の道具と化し、急速に衰退することになる。
46. 前掲36), p. 306。
47. 前掲36), pp. 306-308。
48. 例えば, (1)Cosgrove,D.E., *Social formation and symbolic landscape*, Croom Helm, 1984. (2)Duncan, J.S., *The city as text: the politics of landscape interpretation in the Kandyan kingdom*, Cambridge University Press, 1990.
49. 今里悟之「景観テキスト論をめぐる英語圏の論争と今後の課題」地理学評論77-7, 2004, pp. 483-502。
50. (1)柳田国男『明治大正史 世相篇』朝日新聞社, 1931。(2)柳田国男『豆の葉と太陽』創元社, 1941。
51. アルンハイム,R.(関計夫訳)『視覚的思考—創造心理学の世界—』美術出版社, 1974。
52. フルッサー,V.(深川雅文訳)『写真の哲学のために—テクノロジーとヴィジュアルカルチャー—』勁草書房, 1999。
53. 海野弘『東京風景史の人々』中央公論社, 1988, pp. 220-221。
54. 全国の大学図書館・国立国会図書館の蔵書検索では、画報を標題に持つ雑誌の創刊年は、1880-1890年代が9件、1900年代が29件、1910年代が24件、1920年代が23件、1930年代が15件、1940-1945年が3件である。1920年代には関東大震災のあった1923年に10件、1930年代には日中戦争の勃発した1937年に6件の画報発行がみられ、創刊数が突出している。
55. 飯沢耕太郎『日本の写真家別巻 日本写真史概説』岩波書店, 1999, p. 49, p. 58。
56. 地理学の中心的学術雑誌『地理学評論』においても、写真がもっとも頻繁に掲載されたのは1930年代である。すなわち、1925～1985年の『地理学評論』掲載写真総数1630点のうち、1930年代は991点を数え、他の年代を圧倒している。石井はこの事実に関し地理学景観論の影響を読み取っているが、筆者は逆に地理学景観論そのものがフルッサーのいうテクノ画像の発達による認識論的転回の影響を受けているとも考えられる点を指摘したい。石井實『地理写真』古今書院, 1988, pp. 89-101。
57. 四方田犬彦『日本映画史100年』集英社, 2000。
58. バラージュ,B.(佐々木基一・高村宏訳)『視

- 覚的人間—映画のドラマトゥルギー—』岩波書店, 1986。
59. 白幡洋三郎『旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の「新文化」—』中央公論社, 1996。
60. シヴェルブシュ, W.(加藤二郎訳)『鉄道旅行の歴史—19世紀における空間と時間の工業化—』法政大学出版局, 1982, pp. 69-81。
61. 佐々木彦一郎「富山・東京間飛行旅行の印象」地理教育21-1, 1934, pp. 60-63は、当時の貴重な記録である。
62. 日本人地理学者による初めての空中写真集が発表されたのも1930年代である。小田内通敏『日本・風土と生活形態—航空写真による人文地理学的研究—』鉄塔書院, 1931。
63. 辻村太郎「文化景観の形態学」地理学評論6-7, 1930, pp.657-689。

Can Landscape Studies in Geography be available as Social Critics?:

The 1930's Days of Taro TSUJIMURA, Kenji ISHIHARA and Mantaro KIDO, who took Interdisciplinary Approaches

Hitoshi NISHIBE

On this paper, I focus on the thoughts of three scholars who wrote as creative social critics with the help of landscape studies in geography. A geographer, Taro TSUJIMURA, valued the harmony of a cluster of buildings and the relationship of economic functions in terms of plant ecology. A planner, Kenji ISHIHARA, who relied on his holistic Christian thought, tried to design a cluster of natural objects and artifacts in the regional landscape which promised holistic harmony in evolution theory. An educational psychologist, Mantaro KIDO, valued the concrete domain of everyday life as the critical factor deciding the development of the national culture through a critique of the ethno-psychology proposed by Wundt. Therefore, he persuaded the reform the children's educational domains, that had been filled with conflict by different landscape representations from appositive viewpoints.

In 1930's Japan, various types of landscape studies were presented from different disciplines and perspectives. Behind the fact, new visual mechanical devices had been found to be innovated, and then, the citizens had mastered a visual thinking which could decode a lot of information in images. In such a situation, applying landscape studies in geography, all three scholars related the targets of criticism with wholeness ecologically, and with the past and the future evolutionarily. Then, they tried to criticize the relationships in terms of harmony. If the advantage of landscape studies is found in the ordering of a lot of events, how available landscape studies in geography can be as social critics will depend on the theoretical establishments of relational analysis in the complicated events in contemporary society.

Keywords : landscape study, geography, social critics, visual thinking,
1930's Japan